

自然遊学館 だより No.103

2022 SUMMER

2022. 8. 31 発行 貝塚市立自然遊学館

今号の一葉 「アブラギリの花」

種子からとれた桐油は紙に染み込ませて提灯や和傘に使用されてきました。5～6月ごろに咲く花は花弁の基部が最初は淡い黄色みを帯びており、次第に紅色へと変化していくようです。

今号の窓絵 「ナツノツツシサセ」

秋を待たずして、6月ごろから成虫になり、澄んだ鳴き声が聴こえてきます。

※毎号左図の円の中のイラストが変更していきます



目 次

* ネイチャーレポート

- 二色の浜でウミヒメカノコの死殻の記録
..... 丸山幸代・山田浩二 ... 1
- 二色の浜で有孔虫（オパキュリナ）の遺骸を発見！
..... 丸山幸代 ... 2
- ルイスホソカタムシ
..... 岩崎 拓 ... 3
- 動く蛹 ～タイリククロスジヘビトンボ～
..... 鞍井希風 ... 4

* 行事レポート

- 渚の生きもの
..... 山田浩二 ... 5
- せんごくの杜 昆虫調べ【テーマ：チョウ】
..... 澤田智子 ... 6
- キジハタ稚魚放流
..... 山田浩二 ... 7

* 泉州生きもの情報

- 幻のヤゴ発見！サラサヤンマ羽化奮闘記
..... 鞍井依子 ... 8
- 泉南市岡田でヤドリカニダマシを採集
..... 山田浩二 ... 10

* 調査速報

- 貝塚市二色の浜と近木川周辺の鳥調査 24
..... 鈴木勝也 ... 10
- 蕎原にアブラギリの花が咲く
..... 天満和久・白木江都子 ... 11

* 飼育速報

- ジムグリの連続脱皮
..... 岩崎 拓 ... 12

* 館長コーナー

- 近木川クリーンキャンペーン
..... 秋山芳樹 ... 13

* 皆様からの情報コーナー

- 寄贈標本 14
- 寄贈写真 15

* スタッフ日誌

- 15



二色の浜でウミヒメカノコの死殻の記録

ウミヒメカノコ *Smaragdia* sp. はアマオブネ科の巻貝で、内湾・湾口部の低潮帯から水深 40 m の砂底・砂泥底の海草藻場に生息します (山下・久保、2012)。伊豆半島から瀬戸内海、九州、南西諸島に分布しますが、死殻しか見つからない場所もあることから (山下・久保、2012)、環境省レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類に評価されています。

筆者らは二色の浜 (貝塚市) で冬期を中心に打上げの貝殻拾いを行っていますが、今回、微小貝をターゲットに浜辺の砂を持ち帰り、その中に入っている貝殻を探したところ、ウミヒメカノコの死殻を見つけることができたので報告します。2021 年 10 月 30 日に 1 個体 (殻高 2.2mm、殻幅 2.8mm : 図 1)、12 月 13 日に 1 個体 (殻高 2.3mm、殻幅 3.1mm : 図 2) の計 2 個体が記録されました。本種の生息記録は大阪府ではこれまでありませんが、大阪湾では兵庫県淡路島で見つかっており、海草の中でもウミヒルモ帯に生息することが確認されています (川淵、2014)。今回、二色の浜の砂の中から殻表に模様が残る比較的新鮮な死殻が見出されたことから、付近に生息している可能性もありますが、移入砂に混じって入ってきた貝殻の 1 つとも考えられます。なお、二色の浜ではこれまでウミヒルモ帯は確認されていません。

採集個体は標本として貝塚市立自然遊学館にて登録、収蔵しました (KCMN-Mo1039・1040)。

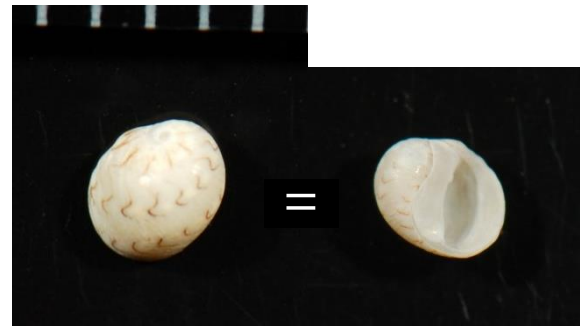


図 1. ウミヒメカノコ 殻
二色の浜 2021 年 10 月 30 日
(1 目盛りは 1mm)



図 2. ウミヒメカノコ 殻
二色の浜 2021 年 12 月 13 日
(1 目盛りは 1mm)

謝辞

本種の同定についてご教示いただいた大阪市立自然史博物館の石田惣氏、南港ウェットランドグループの和田太一氏にお礼申し上げます。

引用文献

- 川淵千尋 (2014) ウミヒメカノコ. In 兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課 (編), 兵庫県版レッドデータブック 2014 (貝類・その他無脊椎動物), 18. (公財)ひょうご環境創造協会, 神戸.
- 山下博由・久保弘文 (2012) ウミヒメカノコ. 日本ベントス学会 (編). 干潟の絶滅危惧動物図鑑. 東海大学出版会.

(丸山幸代 (貝塚市澤)・山田浩二)

二色の浜で有孔虫（オパキュリナ）の遺骸を発見！

海に「おはよう～今日も来たよ」ほぼ毎日のように、二色浜海岸に出れば砂の中の微小貝探しに時を忘れ戯れる。帰りは「ありがとう、また来るね」と言葉を残し家路につく。

2022年5月2日もいつものように砂を持ち帰り洗いながら「お宝出ておいで～」とふるいにかけて乾かす。翌日レンズ越しにお宝をピンセットで探していると、目を疑うほどにいくつも美しい渦巻き状の貝が？思わず「アンモナイトがあった！」と大喜び、アンモナイトでないのがわかっていても、心躍らせ早々にインターネットで検索開始。どうやら有孔虫の仲間であることがわかったものの、海底で暮らす底生有孔虫と波間に浮かんで暮らしている浮遊性有孔虫がいるらしく、どの写真を見ても同形のものに行きあたらない。後日、貝塚市立自然遊学館へ持参し、見ていただきましたが、「詳しくはわからないので何処かの研究機関で尋ねてもいいかもしれない」と背中を押して下さいました。

有孔虫のことを地域的に取り組んでいるところなどをネットで探し、島根半島・ジオパークのサイトに有孔虫の写真が数枚掲示されていたので電話をかけてみたところ、快く写真提供者の方の連絡先を教えてくださいました。緊張しながら勇気をしぼり、島根大学の林 広樹教授のもとに電話をし、要件を話すと有孔虫についてのコメントをしてくださいました。また、林先生は今回の有孔虫の画像と有孔虫を含む二色浜海岸の砂を希望されたので送付しました。

【林先生からのお返事】

①今の二色浜は養浜した砂浜ですが、何処から

運ばれているのかな？

- ②砂(9.6g)の中から送付画像と同一種の有孔虫のオパキュリナ・アンモノイデス 6 個体とほかに 108 個体の有孔虫が得られました。熱帯のサンゴ礁海域からの移入が 4 種（個体数では 58%）、もともと大阪湾に生息している種は 10 種（個体数では 42%）でした。
- ③もっともたくさん含まれているのはアンフィジテギナ属のロビフェラとラディアータの 2 種、これらだけで過半数を占めます。アンフィジテギナ、ソリーテス、オパキュリナは、いずれも熱帯～亜熱帯のサンゴ礁海域でみられるグループで、瀬戸内海には生息していません。
- ④一方で、大阪湾にも生息している種の中で特にたくさん産出したのがエルフィディウム・クリスパム（全体の 2 割弱）です。さらに、エポニーデス・クリブローパンダスやキビキデス、キンケロキュリナなどが産出していますが、これらは大阪湾の中でも、水質が比較的良好な地点に生息するものです。
- ⑤有機汚濁が進行した泥底環境に生息する種（アンモニア・ベッカリ A）も産出しましたが、わずかに 1 個体です。
- ⑥養浜した海浜ではありますが、いわゆる環境修復事業が成功した事によりアマモが生育していることは、海の環境が良くなった事例と言えるのかも知れません。
- ⑦オパキュリナは単細胞生物ですが、体内に「共生藻類」を持ちその共生藻類が酸素や養分を生産することにより、数 mm 程度の大きなサイズまで成長することができます。その共生藻類は、海の「濁度」にきわめて弱く、透明度が高く暖かい海で育ち、そのどこかの南の国でその一生をまっとうし砂と共に二色浜海岸に運ばれてきたのでしょうか。

by 林 広樹

所属：島根大学学術研究院環境システム科学系

二色浜の海浜砂に含まれる主な有孔虫

データ： 2022年5月21日,丸山幸代氏が採取
大阪府貝塚市二色浜西端付近
撮影： 林 広樹 (島根大学総合理工学部)

熱帯のサンゴ礁海域から移入 (全体の58%)

もともと大阪湾に生息 (全体の42%)



今回、発見の発端となったのは、昨年11月に砂の中で微小貝に混じっていた小さな円盤のような個体について、自然遊学館の高田雅彦客員講師に見ていただいたことから始まりました。貝殻ではなく、有孔虫の仲間のアンフィジテギナであることを教えていただき、このことが今の私へとつながり、今後もレンズ越しの有孔虫のお宝探しを継続できればと思っています。

この度お力添えいただきました諸先生方にこの場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

(貝塚市澤 丸山 幸代)

ルイスホソカタムシ

2022年5月3日、せんごくの杜でクヌギの樹幹を見ていた時のことです。カシノナガキクイムシ *Platypus quercivorus* (以下、カシナガ) がクモの巣の残糸に絡まって死んでいました。根元にはフラス (糞や木屑が混ざったもの) が大量に積もっていて、カシナガの孔道も多数あるクヌギです。こんな木が他にもたくさんあるのに、なかなかカシナガの成虫を見る機会はありません (澤田、2021)。

クモがもっとたくさんいたら防除になるのかななどと思っていたら、樹幹の表面をウロウロする細長い甲虫が目にとまりました。カシナガの孔道に頭を突っ込みながら、チェ

ックして回っています（探索しているように見えました）。

ホソカタムシ科のルイスホソカタムシ *Gemylodes lewisii* です（図1）。木に潜る甲虫の中でも、際立った細長さです。幼虫、成虫ともキクイムシ類を捕食するそうです。いかにも孔道に入るのに適した体型をしていて、カシナガの天敵だというサイトもありました（大橋、2017）。



図1. ルイスホソカタムシ（体長9mm）

（貝塚市名越、2022. 5. 3）

5月7日のせんごくの杜講座の時にも、同じクヌギの木で1個体を確認し、参加者の方に見てもらうことができました。貝塚市内でも、ナラ枯れ、カシナガとともに、これから見る機会が増えるのかもしれませんが。

引用文献・サイト

大橋章博（2017）カシノナガキクイムシの天敵
ルイスホソカタムシ．森林のたより 762号
（web版）．岐阜県森林研究所のサイト内
<https://www.forest.rd.pref.gifu.lg.jp/rd/kankyou/mori170301.html>

澤田智子（2021）ナラ枯れを起こす問題虫 カシノナガキクイムシ．自然遊学館だより，
No. 99:6-7.

（自然遊学館わくわくクラブ 岩崎 拓）

動く蛹 ～タイリククロスジヘビトンボ～

2022年5月21日に能勢町の天王で、動く蛹といわれるタイリククロスジヘビトンボの蛹を見つけました。

タイリククロスジヘビトンボとは、幼虫が肉食で、成虫は主に樹液を舐めます。幼虫の生態はよく分かっていないのですが、今回見つけた場所は水量のかなり少ない川でした。

卵は水辺の崖や水面上に張り出した枝や葉裏に卵塊として産み付けられるといわれています。孵化した幼虫は川に降りて水中生活をします。主に他の昆虫などを食べて成長します。幼虫は2～3年かけて終齢幼虫になり、陸上に上がり、その土中で蛹になります。広翅目（ヘビトンボ類）は裸蛹というある程度動ける蛹で、アゴや腹を動かすことができます。なので、他の昆虫などに狙われたときに反撃することもできます。蛹は2週間程で羽化します。自然界での羽化の仕方は明らかにされていませんでしたが、今回は飼育下では苔を敷いた平面的な環境で羽化が成功しました。



図1. 採集したタイリククロスジヘビトンボの蛹

幼虫と成虫で、口器の形は大きく変わリません。ただ、幼虫は肉食ですが、成虫になると主に樹液を舐めるため、その口器は攻撃等

に使われると思われます。

蛹から羽化までの飼育が想像していた通りで、あらためて確かめることができよかったです。幼虫の生態があまりわかっていないので、今後はその部分を明らかにさせていきたいと思います。

参考文献

吉田利男・杉本剛士・林文男 (1985) ヘビトンボの生活史に関する知見. 昆虫, 53 (4) : 734-742.

(自然遊学館わくわくクラブ くらい きな 鞍井 希風)



行事レポート

渚の生きもの

日時：2022年5月28日(土)10:00~12:00

場所：近木川河口前浜

参加者：41人 (うちスタッフ11人)

今年度、初めての館主催行事「渚の生きもの」を近木川河口の前浜にて行いました。新型コロナウイルス感染防止の対応として、昨年、一昨年と中止していましたが、ようやくの再開となりました。第15回大阪湾生きもの一斉調査(大阪湾の沿岸各地で生きものを一斉に調査する取り組み)を兼ねており、本観察会の結果を反映させました。

今回、参加者は30人に絞り、講師には大阪府環境農林水産総合研究所の日下部敬之さんと泉州の貝を長年調べられている児嶋 格さんに来ていただきました。潮が徐々にひいていく海辺で、参加者はひざ下まで浸かってタモ網でハゼ類などの魚や貝、甲殻類などを採集しました(図1)。高校生の中島 歩さん

には投網を打って魚を捕ってもらいました。

各自、採集した生きものは一堂に集めて、講師の方から生物のグループごとにじっくりと種名や生態などの説明を聞きました(図2)。ウミニナやクチバガイなど貝の仲間26種、ヒイラギやヒメハゼなど魚の仲間14種といった生きものが合わせて観察されました(表1)。

海に面した近木川河口の環境は、左岸側には堆積した砂が多く溜まり、満潮時でも陸地化した場所が広がって、例年に比べ海岸生物にとっては生息できる環境が減っているようでした。



図1. 近木川河口で生きもの探し



図2. 採集した生きものの説明

表1. 近木川河口で観察した海岸動物 2022年5月28日

グループ		和名		
棘皮動物門	海鼠綱 イカリナマコ科	ヒモイカリナマコ		
刺胞動物門	花虫綱 タテジマイソギンチャク科	タテジマイソギンチャク		
軟体動物門	多板綱 クサヅリガイ科	ヒザラガイ		
	腹足綱 ヨメガカサガイ科	マツバガイ ヨメガカサ		
	ユキノカサガイ科	ウノアシ コモレビコガモガイ コウダカアオガイ カスリアオガイ		
	ニシキウスガイ科	インダタミ		
	サザエ科	スガイ		
	アマオブネガイ科	イシマキガイ		
	ウミミナ科	ウミミナ		
	タマキビガイ科	タマキビ アラレタマキビ マルウズラタマキビ コビトウラウスガイ		
	アツキガイ科	イボニシ		
	カラマツガイ科	カラマツガイ		
二枚貝綱	フネガイ科	カリガネガイ		
	イガイ科	コウロエンカワヒバリガイ ホトギスガイ クログチガイ		
	イタボガキ科	マガキ ケガキ		
	トマヤガイ科	ウネナシトマヤガイ		
	チドリマスオ科	クチバガイ		
	マルスダレガイ科	アサリ		
環形動物門	多毛綱 サシバゴカイ科	サミドリサシバゴカイ		
	ゴカイ科	ヤマトカワゴカイ		
	イソメ科	イワムシ		
	カンザシゴカイ科	ヤッコカンザシゴカイ		
節足動物門	軟甲綱	ヨコエビ類	ヨコエビ類	
		ホンヤドカリ科	ユビナガホンヤドカリ	
		イワガニ科	ヒメベンケイガニ	
		モクスガニ科	モクスガニ イソガニ ケフサイソガニ タカノケフサイソガニ ヒライソガニ	
		スナガニ科	ハクセンシオマネキ	
	顎脚綱	ミヨウガイ科	カメノテ	
		イワフジツボ科	イワフジツボ	
		フジツボ科	シロスジフジツボ タテジマフジツボ	
	脊索動物門	硬骨魚綱	スズキ科	スズキ
			キス科	シロギス
ヒイラギ科			ヒイラギ	
タイ科			キチヌ クロダイ (幼魚)	
メジナ科			メジナ	
タウエガジ科			ダイナンギンボ (幼魚)	
ネズツボ科			トビヌメリ	
ハゼ科			ドロメ ヒメハゼ	
カレイ科			イシガレイ マコガレイ	
フグ科			クサフグ	
両生綱			ヌマガエル科	ヌマガエル

せんごくの杜 昆虫調べ【テーマ：チョウ】

日時：2022年6月4日(土)

場所：せんごくの杜

参加者：20人(うちスタッフ4人)

「せんごくの杜」は、貝塚市名越と橋本にまたがる雑木林で、多様な生きものが住む里山として保全してくためにボランティア活動などが盛んな林です。本年は、この里山で数回に分けて「昆虫しらべ」をイベントとして開催していきます。

第一回目は「むしの日」である6月4日にテーマ「チョウ」を実施しました。

貝塚市立里山交流センターにて簡単なチョウの説明の後、家族毎に1つの三角缶(採集したチョウを挟む紙を入れるケース)を配布し、採集スタート。



図1. 行事の説明のようすと配布物

子どもたちは外に出て早々に昆虫網を振り回し、チョウを採る気満々です。せんごくの杜の中を進み、田んぼのある陽射しが明るい場所に行くとモンシロチョウやヒメアカタテハなどの大き目のチョウがいっぱいいて、ヤマトシジミなど小さいチョウには目もくれず走り回っていました。

(山田 浩二)



図 2. 採集風景

最後に、里山交流センターに再度集まり、三角缶の中から採集成果を見せ合いっこしました。個体数ではモンシロチョウが一番多く、素早く飛ぶアオスジアゲハを採った小学生もいました。

採集したチョウを標本にしたい場合は午後に遊学館に来てくれば一緒に標本作成まですることを伝えたところ、3家族が訪館してくれて標本を作りました。



図 3. 作成した標本

(澤田 智子)

キジハタ稚魚放流

日時：2022年6月12日(日)10:00~12:00

場所：二色の浜中央マスト付近

参加者：44人(うちスタッフ4人)

協賛：大阪府海域美化安全協会

大阪湾で美味しいお魚がたくさん獲れるよう、大阪府栽培漁業センターでは食卓にあがる魚の稚魚放流を府内沿岸で行っています。二色の浜では例年、岬町にあるこのセンターから稚魚を運んでいただき、コラボ行事として放流を行っています。昨年は新型コロナウイルス感染の拡大のため、中止となりましたが、今年は参加人数を絞ったうえで実施しました。

今回放流した魚は本行事では初めてとなるキジハタというハタ科の幼魚です(図1)。キジハタは関西ではアコウと呼ばれ、食用として高級な魚です。今回、放流した幼魚500匹は栽培漁業センターで約1年間育てられた全長10センチほどのサイズのもので、場長の大道さん自らが運搬して持ってきてくださいました。

放流に先立ち、浜辺のゴミ拾いを30分ほど行ってから、大阪湾での稚魚放流について場長さんから説明頂きました(図2)。その後、参加者は順番にバケツに幼魚を入れて海辺まで持っていき、「大きくなってね」との願いを込めて波打ち際で放流しました(図3)。



図 1. キジハタ幼魚



図2. 栽培漁業センター場長からの栽培漁業
についてのお話



図3. 「大きくなってね」と放流する様子

(山田 浩二)



泉州生きもの情報

幻のヤゴ発見！サラサヤンマ羽化奮闘記

貝塚市広報の「いきものだいすき」にサラサヤンマの記事を載せようと、「サラサヤンマ」を調べました。成虫の写真を見て、あまりの模様の完成度にびっくり。どうして黄色の小さな三角形が星を模すように並んでいるの？ 厳しい生存競争を勝ち抜くのに、この模様が役立つとでも？？どこまでも不思議で、どこまでも美しく、自然界の芸術性の高さに少し

の間みとれてしまいました。

「サラサヤンマの成虫は見つかっても、ヤゴが見つからないんだよ、だから幻のヤゴとよばれているんだ」そう聞いていたので、それもまた調べてみることに。なるほど、どうも一般的な水中で暮らすヤゴと違い、落ち葉が堆積したような湿地にいるそうです。しかし変わったヤゴだなあ、いつか見てみたいものだと、ぼんやり考えていました。

それからしばらくしての4月2日、せんごくの杜での調査後のことです。せんごくの杜でサラサヤンマの飛ぶ姿を見かけるので、ヤゴも湿地にいるのではないかと以前から話をしており、もう少し調査を試みることにしました。このあたりが怪しいと息子が朽木を持ちあげた時です。「サラサヤンマ、おった！」

いともあっけなく、幻が現実となる瞬間がやってきました。とはいえ、今まで見つからないのです。どうしても疑ってしまいます。泥まみれで朽木の裏にしがみついていたヤゴを取り、大事に大事に白い紙に乗せて観察します。どうみても、サラサヤンマのヤゴの特徴です。長い触角、ジャバラの腹部、なんてことだ！ 見つけてしまった！ 幻のヤゴを見つけてしまった！！

ヤゴは遊学館で飼うことにしました。ヤゴがしがみついていた朽木と一緒にいれました。水中を好むのか陸上がいいのかわかりません、湿らせたペーパーを敷き、水を入れた容器もセットしました。泥まみれで木の下敷きになっていたのです。何を食べていたのかも見当がつかず。翅芽のようすから遠からず羽化しそうだと思われたため、夜間はタイムラプス(コマ送り)動画が撮影できるカメラで羽化の瞬間をねらうことにしました。

数日過ぎても羽化はしませんでした。元気そうではありましたが、念のために入れてお

いたワラジムシを食べることはありませんでした。日中は朽木の隙間に隠れ、夜中に動く姿だけをカメラがとらえていました。手に乗せると、まるで陸上の生物のようにスタスタと歩き、犬が尾を振るように腹端を振る仕草は可愛らしく、何の生きものだったかと頭が混乱するほどでした。

2週間が過ぎた頃、我が家で羽化の撮影をしようと、遊学館から連れ帰りました。すると、息子が「今日羽化する」と言い出したのです。目が透けて、トンボの目の色がでてきていると。確かに、今まで茶色一色だった複眼に黄色い点が浮かんできていました。



図1. 羽化直前のサラサヤンマのヤゴ

これは大変。発見時の朽木を立て、あわてて羽化しやすい環境をつくりました。そこに捕まらせると少し動き回って、朽木の上部でじっとしはじめました。ここで羽化すると決めたのだと思い、カメラを用意し、いつでも確認できる状態にとヤゴの横で寝ることにしました。1時間おきにようすを確認しては寝るという繰り返しでした。夜中3時頃でしょうか。懐中電灯で照らすと朽木にしがみついていた姿がないのです。下を見ると、落ち着きなく動き回っています。虫は苦手生きてきた人生ですが、直感で別の羽化する場所を探してい

るんだ！と思いました。

これはまずい。どうしたらいいんだ。頼みの綱の息子はいくらよんでも起きてくれません。何かヤゴがつかれるものを探さねばいけない。夜中の家を探しまわります。確か、いろいろと調べた時に、羽化は倒垂型とあったはず。見つけた場所の近くには背の高い草が生えてた。細長い滑りにくいもの。そうだ。桜の枝だ！蛾の幼虫の食草に桜の葉を利用していたので、その桜の枝をもってきてつかまらせることに。しがみついてくれろ。よしよし。これをヤゴが垂れ下がる角度で、斜めに花瓶にさして…すると、その角度が気に入ってくれたのか、枝の先端でじっと落ち着いてくれました。

羽化が始まったのは5時でした。息子を起こし、タイムラプスと携帯電話の動画を改めてスタートさせます。遊学館の方にも始まったと連絡、みんなで見守ります。ゆっくり進む羽化。命懸けです。頑張れ！出ておいで！美しい姿をどうか見せて。

トンボの頭と胸が出てきて逆さ吊りのように垂れ下がります、「起きた！」の息子の声に慌てて見に行くと、逆さ吊りからトンボが体を起こしていました。この動作だけやたら早い。そこからゆっくり腹部を抜いて、少し枝の先に移動し、翅を伸ばしていきました。



図2. 羽化直前のサラサヤンマのヤゴ

残念なことに、最終的には、羽化不全で翅が綺麗に伸びきらなかったのですが、美しい三角模様を見ることができました。長い長い羽化観察。疲れた。でも楽しかった。命懸けで生きる。昆虫は立派だね。見習わなきゃね。春の朝 8 時、「じゃあ行ってくるね、お疲れ様！」そう声をかけて、私は会社に向かいました。

(自然遊学館わくわくクラブ 鞍井 依子)

泉南市岡田でヤドリカニダマシを採集

ヤドリカニダマシ *Polyonyx sinensis* は、十脚目異尾下目に属するカニダマシ科の甲殻類で、干潟に生息する多毛類ツバサゴカイ科のムギワラムシ *Mesochaetopterus japonicus* の棲管に棲みつくことが知られています。大阪府沿岸ではこれまで阪南市尾崎の前浜干潟で 1 例の報告例 (山田, 2020) があるにすぎませんが、今回、泉南市岡田の前浜干潟において本種 1 個体を採集しましたので報告します。

2022 年月 6 月 2 日、泉南市岡田漁港に隣接する前浜干潟で、シニア自然大学校森と海 of 自然科の方々と一緒に底生生物調査を行いました。その際、浅瀬の砂泥をシャベルで掘り起こしてみたところ、ムギワラムシのちぎれた棲管とともにヤドリカニダマシ 1 個体が見つかりました (図 1)。甲羅は横長の楕円形、黄白色の地に褐色の斑紋があります。鉗脚は左右不相称で、腕節前縁は前に膨らみます。採集個体は左の鉗脚が大きい雌個体で、甲幅 3.1 mm でした。標本は貝塚市立自然遊学館の収蔵標本 (KCMN-Cr777) として登録保管しています。

ヤドリカニダマシは、日本ベントス学会による「干潟の絶滅危惧動物図鑑」では絶滅危惧 II 類と評価され、また、環境省による「海洋生

物レッドリスト 2017」では準絶滅危惧と評価されています。



図 1. 岡田浦で採集したヤドリカニダマシ
(2022 年 6 月 2 日採集)

謝辞

本調査を共に行いましたシニア自然大学校森と海 of 自然科の方々に謝意を表します。

引用文献

山田浩二 (2020) 阪南市尾崎の前浜でのヤドリカニダマシの記録. *Nature Study*, 66 (4) :5.

(山田 浩二)



調査速報

貝塚市二色の浜と近木川周辺の鳥調査 24

去年の 10 月に近木川河口にいた多くのカモは繁殖のために海を渡っていき、カモの数も月ごとに少なくなっていました。

春になると、日本で繁殖をするために渡って来た鳥たちと出会うことができます。代表的な鳥だと、ツバメなどがあげられます。ツバメは、人がよくいる場所で繁殖を行います。カラスの仲間などに卵やヒナを襲われないようにするために人がいる場所に巣を作り繁殖を

しています。近木川の河口でも巣に使うための砂を口に加えて、運ぶ姿を確認することができます。

5月下旬になると、チドリとシギの仲間が河口を素早く歩き回っています。コチドリ（大阪府レッドリスト2014、準絶滅危惧種）は、目の周りが金色で首元が黒くなっています。



コチドリ

（近木川河口 2022年6月24日）

チュウシャクシギ（大阪府レッドリスト2014、準絶滅危惧種）は嘴が湾曲しているため、石の隙間に隠れている甲殻類（カニ、エビ）やゴカイなどを捕食するのに好都合です。



チュウシャクシギの捕食シーン（カニ）

（近木川河口 2022年5月23日）

私は基本的に第1金曜日と第4金曜日に調査を行っています。興味がある方は、貝塚市立自然遊学館までご連絡ください。

（鈴子 勝也）

蕎原にアブラギリの花が咲く

今でも生き残っているのかとても気になっていたアブラギリ *Vernicia cordata* ですが、昨年その存在を確認したままになっていました。当時3本のアブラギリが確認されていましたが（竹本, 1997）、2本は確実に確認できたのですが、同じものであれば20数年たった今でも全然育っていないような状況です。これで本当に大丈夫なのでしょうか。大阪府内で自生している唯一の個体かもしれませんが……。

しかし、1997年6月22日には薄いピンク色の花も確認と記述されています。でも日当たりを含めて生育環境としての条件が非常に悪いので、昨年確認した時には花をつけることができなのではないかと考えていました。

枯れてしまっていないだろうか……。

今年6月8日に和歌山県紀の川市のアブラギリの花がほぼ満開（本号表紙の「今号の一葉」参照）であることを確認したため、蕎原でも咲いているなら今の時期かと思い、6月11日に現地蕎原に行ってみることにしました。

なんと！少なくとも2輪の可憐な花が咲いているのではないですか！雨の降る中、確認することだけはできたものの、まさか咲いているとは思ってもいなかったもので、撮影できる機材をもち合わせていませんでした。頂部の他にも花が咲いている箇所はないかなど探していると、斜面下に2輪の花が落ちていました。今回はそれらを拾って帰ることにし、翌日改めて、撮影に来ることとしました。

しかし、感動はまだまだ続きます。

6月12日晴れ。昨日の雨も晴れ上がり、撮影にと思ったところ、天気良くて、昨日よりも葉が太陽を求めて、しっかりとしていました。そのため昨日見た光景とは少し違っており、葉に隠れて花が撮影しづらくなっていました。

その後、写真を確認すると、なんと他の花の子房が膨れているのではないですか。結実の予感も。しかし今のままでは実生の発芽が期待できるはずもなく・・・。



図 1. アブラギリの花
(蕎原、2022. 6. 12 撮影)

今後、蕎原のアブラギリを後世に残すためにどのようにして守っていけばいいのか模索しています。

引用文献

竹本卓哉 (1997) オオキンカメムシの食樹をめぐって アブラギリ、貝塚に残る！. 自然遊学館だより, No. 13:2-3.

(天満 和久・白木 江都子)



飼育速報

ジムグリの連続脱皮

自然遊学館で飼育展示しているジムグリは、2014年4月に貝塚市名越で採集されたものです。当時は体長44cmで、今は68cmになっています(図1)。他の目立った変化としては、紅色の鮮やかさが失われてきたことがあげられます。市販の冷凍ピンクマウスを解凍して与えています。でも毎年、11月の後半から4月の前半ぐらいまでは、ほとんど摂食しなくなります。



図 1. 生体展示しているジムグリ
(自然遊学館、2022. 5. 11 撮影)

2014年から2020年までの年間脱皮回数を順番に書き出すと、4、3、4、5、5、5、3、4回となります。脱皮の時期も4月から11月までがほとんどで、その間は、だいたい1ヵ月から2ヵ月の間隔になります。これまでの最短間隔は19日でした。

2022年5月7日、今年1回目の脱皮は、頭と胴体後半の皮が脱げない状態でした。スタッフの鈴子勝也さんがジムグリを湿らせてくれていたので、残った皮はするりと剥がすことができました。翌日の朝、わくわくクラブの寺村悠理さんから「ジムグリが脱皮して

いる」と聞き、ケースを見に行くと、今度はきれいな脱皮殻がありました。

＊ これまでの記録の取り方では「2 日連続」の脱皮となりますが、実際には1回目の脱皮が5月6日の閉館後で、2回目が5月8日になってからである可能性もあるので、タイトルに2日連続とは書きませんでした。同様に、上記の19日という記録も、実際には20日であった可能性があります。

(自然遊学館わくわくクラブ 岩崎 拓)



館長コーナー

『近木川クリーンキャンペーン』

かつて大阪湾全体が汚れた中、近木川は環境省の調査で平成5年度(1993年)、平成9年度(1997)と二級河川で水質の最も悪い川として報道されました。このことをきっかけに、大阪府や貝塚市の行政はもとより、流域に住む市民の皆様を中心に、様々な取り組みがなされました。徐々に、これらが実を結び、水質が改善、エサとなる水生昆虫がすみだすことで、アユやウナギが下流で見られるようになりました。数値的なもので表すならば、BOD(生物学的酸素要求量)が平成5年度のおよそ4分の1までになっています。

市民の活動の一つ「近木川クリーンキャンペーン」は、小学理科6年(教育出版)の教科書にも掲載されており、高い評価を受けています。本年も西校区町会連合会主催で「近木川クリーンキャンペーン」が実施されました。200名以上の参加に、貝塚市長、岸和田土木事務所長も加わり、天然記念物泉葛城山ブナ林を源流とする近木川の水質保全に向けて、

貝塚市をあげて守っていかうとする力が伝わってきました。

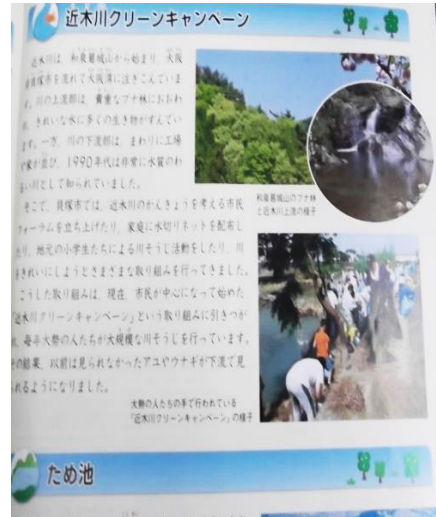


図1. 教科書に掲載されているページ(部分)




図2. 近木川クリーンキャンペーンのようす

実際に参加して作業をする中、岸にはごみが少なく、繁茂する草の合間に生活するクロベンケイ(写真右)が行きかう情景を見、これまでの先達の苦勞の一端を感じ取ることができました。



(秋山 芳樹)

 **皆様からの情報コーナー**

寄贈標本

<爬虫類>

- ◆抽冬正隆さんより
クサガメ 生体1点
貝塚市二色の浜 2022年4月30日採集

<両生類>

- ◆花枝 駿さんより
アカハライモリ 生体6点
シュレーゲルアオガエル 生体1点
ニホンアマガエル 生体3点
和歌山県伊都郡高野町 2022年4月24日採集

<魚類>

- ◆寺田拓真さんより
メジナ(幼魚) 生体約20点
ニクハゼ 生体3点
アミメハギ、マコガレイ(幼魚)、
チャガラ 生体各1点
貝塚市二色の浜 2022年6月26日採集

<軟体動物>

- ◆常道武士さんより
クチベニマイマイ 生体1点
貝塚市澤 2022年5月16日採集
カワニナ 生体1点
貝塚市澤 2022年5月19日採集
- ◆高橋節子さんより
ピンクガイ 殻1点
自宅保管品 2022年6月4日寄贈
- ◆生長正勝さんより
マダコ 生体1点
貝塚市二色の浜 2022年6月26日採集

<甲殻類>

- ◆花枝 駿さんより
サワガニ 生体2点
和歌山県伊都郡高野町 2022年4月24日採集
- ◆常道武士さんより
アメリカザリガニ 生体1点
貝塚市橋本 2022年6月13日採集
- ◆河添純子さんより
ホソモエビ、イッカククモガニ 生体各1点
阪南市福島海岸 2022年6月17日採集
- ◆青山陽子さんより
ホソウデヒシガニ 生体1点
岬町せんなん里海公園海岸 2022年6月17日採集



ホソウデヒシガニ

<鋏角類>

- ◆児嶋 格さんより
マダニ 生体1点
和歌山県紀の川市 2022年6月13日採集

<昆虫>

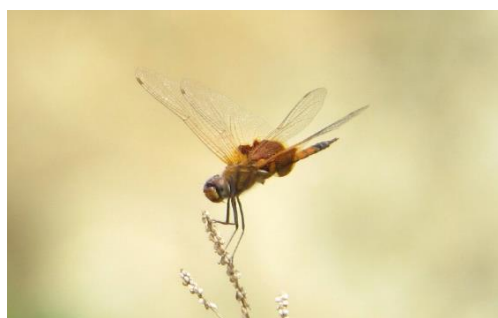
- ◆鞍井希風さんより
サラサヤンマ(羽化殻) 標本1点
貝塚市せんごくの杜 2022年4月2日採集
- ◆高橋節子さんより
アカホシテントウ(蛹) 生体7点
貝塚市北町 2022年5月15日採集

- ◆常道武士さんより
ブドウスカシバ 生体 1 点
貝塚市澤 2022 年 5 月 19 日採集
ウメエダシヤク (蛹) 生体 1 点
貝塚市澤 2022 年 5 月 25 日採集
セグロアシナガバチ 巣 1 点
貝塚市橋本 2022 年 6 月 7 日採集
トビイロスズメ (幼虫) 生体 1 点
貝塚市澤 2022 年 6 月 23 日採集
- ◆川口博久さんより
ウバタマムシ 死骸 1 点
貝塚市二色 2022 年 6 月 2 日採集
- ◆三宅正親さんより
コクワガタ (オス) 生体 1 点
貝塚市澤 2022 年 6 月 10 日採集
- ◆石田智映さんより
カブトムシ 生体 8 点 (※累代飼育個体)
貝塚市清見 2020 年 7 月 1 日採集
- ◆谷口 治さんより
サツマヒメカマキリ 生体 1 点
貝塚市木積畑 2022 年 6 月 28 日採集

寄贈写真

<昆虫>

- ◆秋武仁志さんより
モノサシトンボ (メス) 1 点
貝塚市馬場たわわ 2022 年 4 月 17 日撮影
ベニトンボ 2 点
熊取町和田山 2022 年 5 月 22 日撮影
ベニトンボ 1 点
熊取町和田山 2022 年 6 月 12 日撮影
- ◆藤村雅志さんより
ハネビロトンボ (未熟オス) 1 点
熊取町成合南 2022 年 6 月 20 日撮影



ハネビロトンボ (未熟オス)



スタッフ日誌

4月16日、二色の浜での潮干狩り(二色の浜観光協会主催)が始まりました。昨年、一昨年とコロナ感染防止対策のため海水浴が中止されていまして、久しぶりに人の賑わいが戻ってきました。(ス)

5月19日、和歌山市加太の磯で行われた和歌山県立桐蔭中学校1年生の海辺の生きもの観察会に出張してきました。潮のひいた磯ではヒジキなど多くの海藻が繁茂していて、すべてこけそうになりながらも、生徒たちは熱心に生きものを採集していました。マダコも見つかり、歓声があがりました。(山)

自然遊学館だより 2022 夏号 (No. 103)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel: 072 (431) 8457, Fax: 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

ホームページ

<https://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/>

フェイスブック

<https://www.facebook.com/sizenyugakukan>

発行日 2022.8.31

この小冊子は庁内印刷で作成しています。